『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第７回】

前回、「罪」という言葉を耳にすると、わたしたちの多くは「犯罪」にあたる行為を思い浮かべる … と書きました。それらはもちろん、キリスト教が説く「罪」の中にあります。でも、それだけではありません。わたしたちがふだん、あまり罪とは感じないこともキリスト教では「罪」として説かれます。きょうは「上智大学夏期神学講習会」で、２～３度お話を聞く機会を得た森一弘師（元カトリック東京大司教区補佐司教、現・真正会館理事長）の本から引用します（『　』内）。

《罪》について（その２）

『聖書の世界では、人間は生まれながらにして神様との関わりがあるという視点にたって人間を見、物事を見ようとしています。その関わりを人間が無視したり、踏みにじったりするとき、それを罪と表現しているのです』。

さすが森先生、むずかしい【罪】という言葉をわずか２行半で、かんたんに言い表しておられます。でもキリスト教になじみのない方は、わたしたちが〈神との関わり〉の中にある ― ということについて、どのようなことなのかはっきりしないのではないでしょうか。それについて考えてみましょう。

◇【罪】とは人間としての《的を外した行為》である

ギリシャ語で【罪】は〈**ハマルテイア**〉というそうです。この言葉は**「的をはずした行為」**という意味です。**『本来人間としてこうしなければならないという的があり、その的を外してしまうとき、その行為を、罪と表現している』**のです。「ホントはこうすべきだったのに … 」と、自分がおこなったことについて後ろめたさを感じた経験はたくさんあると思います。

友人のお母さんは数年前から認知症を発症し、また、左の大腿骨の付け根を骨折して車椅子の生活になり、現在グループホームに入所しています。彼は退職前、勤めの帰り道に施設があったこともあり、毎日わずかな時間でしたが顔を見てから帰宅していました。退職後は週３～４回はようすを見に行っていました。２年目になり、その回数が週　２～３回になり、さらに　１～２回 … と減っていきました。

健康状態が回復したことや、施設のスタッフの方々がしっかり介護してくださっているという安心感もあるといいます。お母さんは認知症が少しすすみ、記憶力の低下が顕著になってきているので、時々会話が成り立たないこともあるそうです。「自分から話しかければいいのだけれど、お母さんが好きだった書道や仕事をしていたときの話をしても、あまり興味を示さなくなり、話題を見つけるのに苦労する」とのこと。「きょうは行かなくちゃ … 」と思っても、「明日行けばいいか」とか、「行って何を話すかなぁ … 」と考えると、足が遠のいてしまうそうです。

「　１週間に　１～２度じゃあ、きっと母もさびしいよな … 」、「できるだけ行かなくちゃ … 」と思っていながら、いろいろ理由をつけて行かない … 。「こうしなければ」という思い（「的」）はあるのだけれど、それをしない（的を「外す」）。ひとり息子の彼はお母さんに対し

て〈罪悪感〉を感じています。こころが安定しない、落ち着かないと言います。

◇〈良心〉のはたらき

こうした罪悪感（罪意識と言ってもいいでしょう）や不安は**『良心のはたらきによるもの』**と森先生は書いています。**『良心とは、ギリシャ語で、〈シュネイデシス〉といいます。語源的には、「同時に知る、同時に自覚する」』**という意味です。**『一つの行為をしながら、同時にその行為が人間として的を外した行為であるかどうかを判断している働き』**です。

『自分がその時選択した行為が、人間として適切な行為であったかどうかを判断する働き』が〈良心〉です。

前回、あの吉岡が**『俺は最低の人間だな。もし、今、この女の好意を自分の欲望のために利用すれば、俺は最低な人間になるな』**と思った ― という箇所をご紹介しましたが、そういう気持ちになったのは〈良心〉が働いたわけです。

吉岡だけではありません。わたしたちはたくさんの欲望・欲求をもった存在です。例えば、「お金が欲しい」、「楽をしたい」、「おいしいものをたくさん食べたい」、「出世がしたい」、「人に認められたい」、「大きな家に住みたい」、「宝くじを当てたい」、「素敵な女性（男性）に会いたい」、「外国に行きたい」 … 。数えたらキリがないほどありますよね。わたしだったら、「大きな書庫と書斎、礼拝室がある家に住みたい」、「ポーランドへ行って、コルベ神父様の生家とアウシュヴィッツを訪ねたい」、「ドイツに行って、サッカーを観たい」、「野球シーズンは西宮市に住んで、甲子園で阪神タイガースを毎試合観たい」、「鹿島アントラーズのシーズンチケットを購入して、ホームゲームを全部観たい」、「冬は沖縄に住みたい」、「遠藤周作さん・井上ひさしさん・司馬遼太郎さんの、まだ買っていない本を全部買いたい」、「1 日 2 時間の運動と、８時間の読書をしたい」、「家事を手伝わなくていい毎日を送りたい」、「オーロラが見たい」、「NHK《おはよう日本》の鈴木奈穂子アナとお食事をしたい」… かな。

人間がその自由をつかって何をするかを決めるとき、良心はその人のこころの中で活動します。「これ、あまりいいことじゃないかも … 」と感じることをしようとするとき、私たちのこころに「それはまちがっているよ！」という声が聞こえます。「うるさいなぁ！　引っ込んでろ！」と耳をふさいでも、消えることはありません。**『その声を無視したり否定したりし続けると、後ろめたさ・不安感・罪悪感が生まれ、心の平安・安らぎ・晴れやかさ・統一感を失ってしまいます』**。森先生は**『ある意味では、こうした不安感、罪悪感は、人間にとっては恵みと言うこともでき**る』と語ります。なぜ、不安感や罪悪感が〈恵み〉なのでしょう。**『不安感、罪悪感があるからこそ、自分を振り返り、本来の自分に立ち戻ろうとする気持ちが芽生えてくるからです』**。教会は、**『（良心とは）人間一人ひとりの心の奥で人間として歩むべき道を示す神の声であると説明してきました』**。私たちのこころの奥ふかくから響いてくる〈良心の声〉を、《神の声》として受け取るのです。

〈罪〉と〈良心〉の背後には、**『わたしたち一人ひとりが人間として何を大事にして生きようとしているかという問いが潜んでいる』**と、森先生は続けます。次回はこの「何を大事にしたらいいのか」について考えます。『わたしが・棄てた・女』から、しばらく離れてしまいますがおゆるしください。では、また。

【引用した書籍】

・森　一弘　**『キリスト教入門　Ｑ＆Ａ』**（教友社、2008）